

スリランカの幼児教育の現状と考察

The Present Condition and Consideration of Infant Education in Sri Lanka

三井圭子*

(平成28年1月20日受理)

要約

スリランカ・ハプタレー地区の幼稚園の訪問と保育交流が4回となった。スリランカの幼稚園の保育内容に視点を当て、改めて幼児教育を考えたい。日本は保育の新制度になり、認定こども園への移行が進んでいるが、様々な保育の方法、形態がある日本の幼児教育と考え合わせながら、スリランカの幼児教育の現状と考察をしていき、幼児教育の今日の在り方を考える。

キーワード：幼児教育、創意と工夫、保育の内容

keywords：infant education, creation and ingenuity, contents of the early childhood care and Education

1. はじめに

スリランカ・ハプタレー市立幼稚園への訪問を重ね、またコロombo市街の2つの幼稚園を訪問する機会も得て、幼児教育のあり方を改めて考えることとする。

日本の幼児教育は、130余年の歴史があり、幼稚園教育要領の改訂を重ねながら、教師主導型の幼児教育の反省から、幼児を主体とした幼児教育に変わっていく。

それは、教える教育ではなく、子どもの学びを支え、励まし、見守り、一人ひとりの子どもの能力を伸ばし、心情を大切に、その子なりの成長発達に添った幼児教育に進んでいく。

生きる力をつけ、自立に向かっての幼児教育である。また、心情、情感を大切にするため幼児教育は心の教育とまで言われるようになる。

幼稚園、保育園の両方の機能、役わりを備えた幼保連携型認定こども園という新制度が始まる。制度上のことであって、保育の内容は、幼稚園教育要領、保育所保育指針の内容を幼保連携型認定こども園教育・保育要領にそのまま移行している。

日本には様々な保育の方法、形態があり、園、地域、区市町村の考え、方針がある。

しかし、目の前の子どもたちが心身共に健康で、明るく活発に子どもらしく育つことを誰もが願い日々保育を進めているはずである。

「[幼保連携型認定こども園]とは、義務育及びその後の教育の基礎を培うものとしての満3歳以上の子どもに対する教育並びに保育を必要とする子どもに対する保育を一体的に行い、これらの子どもに健やかな成長が図られるよう適当な環境を与えて、その心身の発達を助長するとともに、保護者に対する子育ての支援を行なうことを目的とし、この法律に定めるところにより設置される施設という。』¹⁾と就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律に、述べられている。また、幼保連携型認定こども園教育・保育要領作成員でもある先生のお話も聴く機会があったが、これからは、満3歳以上の子どもには、しっかりと幼児教育をしていく時代である。と強く話されていた。幼保連携型こども園になる所などは、幼児教育を進めることがはっきりしている。

一体、幼児教育は、現実的にどうすることなのかという、戸惑いもみられ、教師主導型が復活する懸念も出てくる。

(*みついいこ 保育科講師 幼児教育)

幼児教育は見えない部分があり、それを見える方法をしていくなれば、見せる保育、見える保育形態になってしまうのではないか。

ここで、保育の方法を論じるのではなく、発展途上国スリランカの幼児教育の現状を見ながら、もう一度、私なりに幼児教育の考察をしようと思う。

2. ハプタレー市立幼稚園

スリランカの幼稚園は、3歳児、4歳児の2年保育である。5歳児は小学校に進む。

4回のスリランカ訪問で、毎回スリランカ・ハプタレー市立幼稚園を訪問している。そこで、保育内容をじっくり見ることができたのは、2013年と2014年である。

保育者がどのような保育を進め、何を保育の指針としているか。一日のデイリーはどのようなものかを知る。

(1) 1日のデイリー（訪問日）

表1

時 間	保育の活動
8:00	・登園 持ち物の整理 ・自由に遊ぶ
9:00	・朝の集会とリズム体操
9:30	・クラス毎の手遊び表現遊び
10:00	・制作をする 絵を描く、ちぎり絵で字を覚える他
11:30	・昼食の準備と昼食 ・自由に遊ぶ（戸外）
13:30	・降園準備をする
14:00	・降園する

概ね1日の流れはそう日本とは変わらないが、保育の中心は、すべて保育者の指示通りである。

朝のリズム体操は、基本的な生活習慣を身に付けるために、言葉を入れながら、動作をする。

英語も覚えるように、英語の歌を歌いながら身振り、手振りをしている。



写真1) 朝の集会



写真2) 集会での手遊び

身振りや、手振りなどは、どのように手を洗うか、顔を洗うか等生活習慣を身に付けるためのものであり、英語に慣れることになる。

(2) クラス活動

ハプタレー地区で、園庭も広く、遊具も豊富にあり、園舎もきれいに改築され、トイレも完備しているため、年々園児が増加している。

表2 2014年度の園児数

園児数	内 訳
20名	シンハラ人
35名	タミル人・ムスリム人

そのため、保育室を2つにしてある。

2011年訪問時は1つの保育室であったが、園児の増加で、トイレ側の小さなホールと元の保育室とを区切ってしまう。

教員はシンハラ人組・タミル人、ムスリム人組とそれぞれ1人ずつである。園長先生もいる。

そこで、クラスは、3歳児、4歳児の混合保育を実施している。

朝の全体の集会後は、クラスでの活動が始まる。

人数も多いし、保育室も狭い、タミル人ムスリム人の子どもたちは、ムスリム人の教員との保育を園庭でする。

シンハラ人の子どもはシンハラ人の教員と一緒に、広い方の保育室で、輪になりリズム遊びを楽しんでいる。

クラスのまとめ、意識付けるには、子どもがわかりやすく、一人ひとりの顔が見える円形になる。指で、数を数えたり、手拍子をしたりと、子どもたちは先生と一緒に遊び、数の数え方等を学んだり、教員研修での「ロンドンブリッジ」のイングリッシュソング等で子どもたちと楽しむ。



写真3) シンハラ人組 円形になって



写真4) タミル人、ムスリム人組 円形になって

シンハラ人の子どもの保育室では、机の前に座り、“お勉強”の時間が始まるのである。

ちぎり紙をし、あらかじめ鉛筆で書かれてあるシンハラ語の一字をなぞって、貼っていく。

3歳児、4歳児と同じ作業である。

ノリはスッチックのりであった。

しかし、紙を細かくちぎり、貼っていく作業は中々進みにくい。泣き出す子もいる。



写真5) ちぎり紙での文字の勉強

タミル人、ムスリム人の子どもの保育室では、一人1冊のノートで、字の練習と数量の勉強等もある。動物のか形等も同じ様に、種かビーズを貼り、材料を替えたり、色を付けながらの作品作りである。黒板にはそれぞれのクラスでシンハラ語と数字、タミル語と数字等書かれている。ノートに書き写しをして覚える。先生の机の上にはノートが重ねて置かれていて、書き直したり、検印されていた。



写真6) 花・蝶の形

このように見ていくと、文字、数量、大小、形の知育に力を入れている。保育室に展示し、保護者が見ると教育をしてもらっていると安心する。

それが保護者の願いでもある。

しかし、写真7)のように、子どもの自由に描いているところもある。2色の折り紙で、犬の顔、体を折っている。その犬の顔がそれぞれの子どもの思いの顔になっている。また、テントウムシの体に顔、手足も描いている。そんなところに少しホッとさせる部分がある。



写真7) 犬とテントウムシ



写真8) 円、三角等様々な形の組み合わせ

3. 教員のテキスト

指導の基となるテキストがある。州からの配布物である。

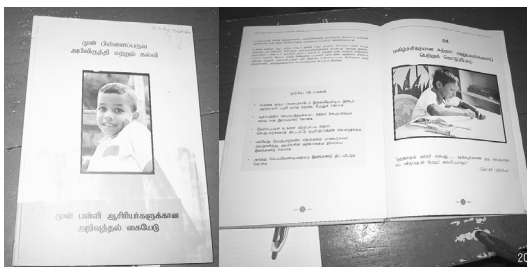


写真9) テキスト

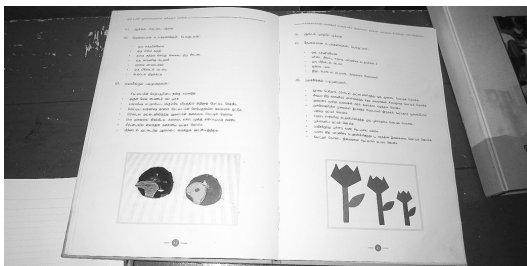


写真10) テキスト

内容はどのように、文字、数量、大小等を動物、草木花、虫で造形表現をしていくか、見本が描かれている。それが、マニュアルとしてそのまま利用する。しかし、そのまま利用するのではなく、教員の工夫と、子どもの想像と創造を大事にしてほしいと思う。

一日の生活の仕方、昼食の食事内容等も、写真入りで表示してある。また、配布物なのか、英語の表もある。

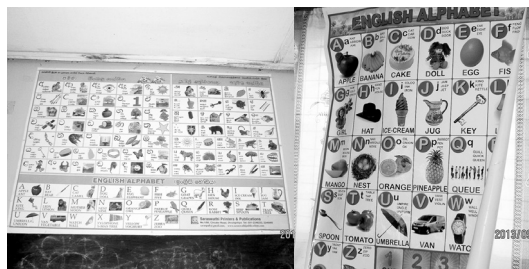


写真11) シンハラ語・英語のポスター

写真11) のように、Aは Apple Bは Balloon 等アルファベットのポスターである。また、シンハラ語、タミル語の表も掲示してあり、訪れた時は、保育室一面に子どもの作品と一緒に掲示物があった。

子どもには見て覚えるようにとの思いと、保護者へのアピールとなる。日本人が訪問する日は、保護者、近隣の人々も幼稚園に来て、行事の参加する。これも日本の幼稚園行事と同じ状態であると感じた。地域の幼稚園としての存在は重要であり、地域の人々の支援も大事である。

4. 子どもたちの遊ぶ姿

園で自由に遊ぶ時間はあまりないハプタレーの幼稚園の子どもたちであるが、わずかな時間の子ども遊ぶ姿があった。机上の勉強的な保育から子どもの遊びから学びになる保育のきっかけがそこにある。どうしても自由な遊びの姿に目がいく。

遊具が豊富な園庭で、円形ジャングルジム、ブランコ、滑り台、ぶら下がり回転塔等々で遊ぶ。

友だちと一緒に登る、滑る、ぶら下がる、楽しさ、嬉しさを味わっている。

大きな木で遊ぶ、ブロックで乗り物ごっこ（こちらの想像）等短い時間だが、子ども同士のかわりの姿が見られる。しかし思い切って遊べているのだろうかという疑問もある。

子ども同士で遊ぶ姿はどこでも一緒である。

子どもが見つけた遊び、楽しむ遊びは、マニュアルにはない。そこから子どもと共に学びへとつなげるには、どんなことが力になり、知ることができ、興味に繋がるのかである。



写真12) 遊具で遊ぶ



写真13) 乗り物ごっこ



写真14) 大きな木の下

写真12)、13)、14)のように、園庭での遊びは教員があまりかかわらない。本当に子どもの意思で遊んでいる。筆者がカマキリを見つけそっと子どもに差し出すと、慌てて手を引っ込めその場から逃げる。触るのがいやなのか、怖いのかどちらかであろう。周辺が豊かな自然であっても自然物、虫などにはあまり興味を示さない。

日本では、自然のかかわりを大切にしている園が多く、5月はマル虫に興味を持ち、蝶、トンボ、バッタ、カエル等 小虫、小動物をあげるときりが無い。もちろん初めが嫌がる子もいるが、興味を持ち面白い、触る、追いかけるから、集めると保育の種になり、遊びが広がる。そこからお

話も広がるのである。

ハプタレー市立幼稚園は勉強の時間と遊びの時間がはっきりしている保育であると感ずる。

自然に関心を向ける保育をしなければ、園児も関心を示さない。

2014年に京都市内2大学の学生との交流があった。

その遊びの姿を捉えながら考察したい。

①「きらきら星」の歌を歌う②紙飛行機を作り飛ばす③ダンスを楽しむ④しっぽ取りを楽しむ
これは日本の幼稚園で楽しむものである。

「きらきら星」の歌は日本語、英語で歌う。周りの大人もよく知っていて、英語での合唱ができた。

②紙飛行機は写真15)のように、1つの机に3、4人が座り、2人の学生が折り方を教えていく。

3歳児にとっては中々難しい。しかし学生は丁寧に教えながら、完成させていく。それを園庭で飛ばしっこをする。飛ばすコツが分からない子どもたちであるが、学生に飛ばしてもらい笑顔で取りに行っている。折り紙はしても、それを使って遊ぶことをしないのかもしれない。保育室内は折り紙で様々なものが展示してあるが、作品にすることである。遊ぶおもちゃの発想が無いのではと思う。

飛ばすためにはどんな折り方の工夫があるか、風の影響は、飛ばし方は高くか、それとも低くするのか、スピードを出すために、飛ばす方法を考える。このひとつの紙飛行機から様々な学びがある。そんな気づきの保育が、子どもの興味を引き



写真15) 紙飛行機を作る

出し、科学的な思考の芽生えとなるのではと思う。

次は④しっぽ取りで、取り合いするより、学生が追いかけていくことにする。

コーディネーターの話だとしっぽ取りのような遊びはしたことがない。この人も一緒になって楽しむ。しっぽをとられないように、くくりつけてもちろん違反だがしかし、このように思い切り遊びこむということが幼稚園の中ではないのかもしれない。追いかける面白さ、思い切り走る快感、遊んでもらうことから、自分たちで楽しんでいく方向になってほしいと願う。届かない吊り輪を抱いてもらってぶら下がり、高いすべり台から待ち受けている学生の下へ滑り降りる。子どもの表情は満面に笑顔である。あの制作のときに泣いていた顔はないのである。

遊びで育つ子どもの姿の大切さを改めて思う。

5. コロンボ郊外の2つの幼稚園

(1) Golden Kids Pre-School

運 営	個人（園長）私立
園 児 （シンハラ人）	4歳児 15名 3歳児 11名 2歳半 2名 乳 児 5名（デーサービス）
教 員	2名（園長含） 乳児担当1名（スタッフ）
屋 内 設 備	保育室1 乳児室1
屋 外 施 設 遊 具 等	トイレ 手洗い場 ブランコ 階段上りができる遊具 すべり台 ダイヤ 小屋 園庭は狭い
そ の 他	保育料徴収 おやつ有り お弁当持参

民家を改装し、1つの保育室を衝立で仕切り、3歳児と2歳児のクラス、4歳児のクラスを運営している。4歳児は園長先生が担当で2、3歳児は若い先生であった。

奥に乳児の預かり部屋があった。そこには少し年齢が高い女性のスタッフがいる。

道を隔て、園長宅があり、そこからお茶、おやつを運んでいた。

トイレ、手洗いの整備については、NGO スラン

ガニ基金の研修でも力を入れて、当初は洗面器（台付）を配布していたと聴く。水道が付いている手洗い場が屋外に設置され、食事前、屋外で遊んだ後の手洗いの姿があった。

都市郊外での幼稚園では、トイレ、手洗い場は整備されているが、山岳部の茶農園地域の幼稚園ではまだ、整備されていない場合が多いし、あっても掃除等が行き届かなくて利用ができない状態であった。

(2) Co-op Pre-School

運 営	個人（園長）私立
園 児 （シンハラ人）	4歳児 12名 3歳児 8名
教 員	2名（園長含）
屋 内 設 備	保育室3 玄関ホール
屋 外 設 備 遊 具 等	トイレ 手洗い 井戸 ブランコ 網が張っている遊具 タイヤ 園庭は狭い
そ の 他	保育料 教材費徴収 お弁当持参

園長宅を改装し、保育室としている。

全員靴を脱いで入っているため、清潔である。靴は軒下に揃えて置かれてあり、下駄箱は無い。窓はあるが各部屋は暗い。電燈は各部屋に1つで電球のみで、部屋中を照らすものではない。

(3) 両園の保育の内容

保育室の提示物や保育を観察させていただいた限り、ハプタレー市立幼稚園とはそう変わらない。

知育教育に力を入れ、制作物、造形物に現れている。しかし、教材が豊富で、整理整頓がなされている。空き瓶、空き箱等の入れ物を利用した、教材の整理をし、個人の作品を重ねて貼り展示している。絵の具も使用し、合わせ絵、糸を絵の具で色をつけ折った紙の中を通す等の造形である。

ここに子どもの偶然な造形の楽しさを味わっている。

リズム遊び、ゲーム的な遊びも、先生の誘導、指示があり先生と共に楽しんでいる姿がある。



写真16) 整理された教材



写真17) 個人作品

子どものお誕生日表、一人ひとりのカレンダーが壁面に貼られて、数字をいれる。計画的な保育の展開をしている。何をどう教えていくかを明確にしている。

しかし、3歳児、4歳児の同じテーマであるがやり方、材料などの違いは考えられている。

訪問日、写真18)、19)のように蝶の制作で立体的に作るため、卵の殻を丸のまま使用する。3歳児にとっては四苦八苦で、卵の殻がつぶれてしまい泣いていた子もいる。

蝶の体を3歳児は新聞紙を丸めたもの、紙コップのようなものでつぶれないものを使用する教材の配慮が要るだろう。年齢を考えながらの保育の展開は今後も必要となる。

子どもの1年の成長発達の差は、大きいし、作ることを楽しみ、その蝶を飛ばして遊ぶ喜びに繋げる事である。

後日、園長先生はスリランカの幼児教育の指導者の育成にも携わっているとお聞きした。



写真18) 蝶の制作 4歳



写真19) 蝶の制作 3歳

(4) 両園の子どもの遊ぶ姿

園庭は狭いが、遊具もあり、プランターに稲の栽培をしている。園舎、園庭はフェンスで囲まれ、

外側は木々が生い茂っている。人家に囲まれた状態である。都市郊外の住宅地であるが、スリランカの特徴的なバナナの木、ココナツの木等大木で密林の中の住宅地であり、幼稚園である。

園庭には遊具と大きな椰子の木がある。Golden Kids Pre-Schoolでは、伸び伸びと外で遊んでいる姿があった。保育室の活動が終わると、外遊びの時間となる。1日の時間配分が考えられ、外遊びが終わると昼食である。トイレ、手洗いを済ませ、保育室へ入る。清潔にするということも習慣付けるということもなされていた。



写真20) 側転する子



写真21) 椰子の葉で砂遊び

狭い園庭だがうれしそうに「できるよ」と側転を見せてくれる。椰子の茎に砂を流して喜ぶ姿、ここに園庭で遊ぶ子どもの自然な姿に触れた。

側転ができるのが嬉しい、見てもらいたい、認めてもらう喜びがある。砂を茎に流す、面白い、さらさらと流れる、いい感触がある等色々と感じ、考えていると共に小さな発見もある。

子どもの遊ぶ姿は参観している側にも、癒される気持ちになり、屈託がない子どもに出会うので

ある。

Co-op Pre-School では、保育室がいくつもあり、人数の多い4歳児が2～3つの部屋で保育が進められている。制作の時間である。保育室には天井から、色々な立体的な造形物がぶら下がり、壁面には子どもの絵の作品が掲示され、窓の下には、ココナツの象が並べられ、造形展の様相であった。その制作物をどう子どもの遊びに取り入れられているか、遊ぶ姿はなく、展示物として扱われている。

風の絵、小鳥の絵が下書きされ、そこにちぎり絵として、色紙を貼っていく。

形、色合いを覚えていく。ワークブックも使用しているとのことだった。まさにお勉強の時間である。参観時間が短いため園庭での子どもの自由な遊びは見られなかった。



写真22) 保育室 (Co-op Pre-School)

6. スリランカの訪問幼稚園の保育内容の考察

遊びという本来の子どもの姿から、幼児期の保育へと繋げながら、制作も喜びと楽しさで、遊びへと発展させて欲しいと願う。

筆者も保育現場で、指導を受けるとき、制作、造形は、子どもたちの作業にはいけない。あくまでも、楽しさ、作る喜びになるように進めることだと教えられた。大人は見た目を重視し、喜びや楽しさを見落としてしまう。子どもの心情まで思い巡らさなければならぬ。筆者も造形表現は好きである。子どもの取り組む姿は見ているだけでも楽しいし大人にはまねのできない活動である。制作、造形は好きになってほしい。しかしあ

くまでも保育活動として捉えなければならない。

絵画、造形展を在る幼稚園で見る機会があった。筆者の現役時代も同じだが、展示するのは、子どもたちが保育の中で、活動し、表現したもの、遊びの跡が見えるものを作品として展示し、保護者、地域の人々に見ていただく。子どもも自分の描いたもの、作ったものを見ていただくのはうれしいし、認められると自信も付く。

子どもが遊びの中で作ったものを輝くようにするのが保育者だと教えられた。

子どもにとっては遊びの中の表現なのである。

同じ折り紙の動物でも、自由に顔等を描く部分があると、その子のもとなる。その子の表現となる。様々な教材を使用する経験も大切で、様々な教材の違い、使い方の工夫もある。そして、その活動、遊ぶ姿には子ども一人ひとりの人格が表れる。そのように子どもの活動や遊びを捉えたい。

折り紙は、日本から訪問があれば、折り紙をして保育交流する。それがスリランカの保育にも取り入れられているのである。やはり指先、脳の活性化によいとされている。

この2つの幼稚園は年齢別クラス担任制であった。シンハラ人家庭からの子どもたちである。

やはり都市に行けば、保育料を徴収し、経済面は少し保障されている。そこで、働く教員へ報酬もあるが、まだまだ小学校教員から比べると低い。公的支援もあまりない。そんな中でも熱心に幼児教育に携わる人々がいて、研修にも熱心に参加している。²⁾ 20数年間スリランカの幼児教育を支援しているスランガニ基金の馬場繁子さんの話では①親の幼稚園に対する期待は強い。②大きくなって困らないようにする。③文字を教えて欲しい。④英語を早くから教えて欲しい。

教員の支援の状況では①年2回の研修の実施と保育情報誌の2ヶ月に1回発行と無料配布②内容は絵本の紹介、折り紙、子どもにあった環境、幼稚園経営の方法、英語、タミル語の会話、子どもの出欠の把握方法、長期欠席は必ず理由を聞く③教材の紹介と廃材の利用方法④ココナツでの遊具作り(ブランコ)などである。

今教えるよりも長期的な視点で見ると、遊び中心の学びのほうが成功するということが少しずつ理解されてきたと述べている。

しかし教員の研修は具体的な保育の方法を学びたい、という希望が強いと聞く。理論的な事を学ぶ事が、後回しとなっている。

子どもの心身の成長発達などを学ぶ機会があると、子どもの見方、教育の方法が違った形で進められるのではと思う。

努力はされているが今のスリランカの幼児教育の現状である。

7. まとめ

スリランカの幼児教育を考えると、制作、造形、歌でのリズム表現である。日本でもされている事である。然しその方法、考え方の違いであろう。

大人からの押し付けではなく、あくまでも、子どもの心身の成長にあったもの、興味のあるもの、面白い、楽しい、うれしいと心情的なものになっているか、出来上がったものよりも、その作る過程を楽しんでいるか、作品よりも、ある時は遊びの道具として活用しているか、それがやる気、意欲につながり、遊びが楽しく展開する。

〇〇遊びとして捉えていき、中身が豊かになる。

保育は教師にとっても楽しい。ねらい、意図を持つ。そこに見通しを立て、予測し、環境を用意して、保育の工夫と創造がいる。

玉川学園幼稚園園長である粉川雅至先生が述べておられる。技術者だった方であったが、幼稚園経営をされるようになり、保育を勉強されている。

「自然を題材にした表現の保育」の実践の中、研修、公開保育等の話は、驚くべきことにいちいち納得できたのです。保育の話ではあるけれども基本的な部分で科学技術の分野と考え方が共通するのです。科学技術の世界では、常に未知のものを探求し新しいものを創りだすことが求められます。目の前で起こっている現象を謙虚に見つめ、過去の経験や知識を踏まえて自分なりの仮説を立てたり創意工夫を施したりして試行錯誤しながら前進します。幼稚園における「自然を題材にした表現の保育」でも子どもはまさにこれと同じプロ

セスをたどる。(途中省略) 子ども一人ひとりの興味の在り様によってあらゆる分野の才能の育ちに対して、道徳的な価値観の育ちにも資する。

目の前の子どもの姿を謙虚に見つめて創意工夫、試行錯誤しながら日々の保育に全力を傾ける。技術開発の世界も、保育の世界もマニュアルはありません。望ましい結果を得るための努力は簡単なものではありませんが、そこに仕事のだご味があり生きる喜びがあるのです。³⁾」と述べられている。

様々な保育の方法、形態がある中、まさに保育全般に通じる事なのではないかと思う。

よく言われる子どもの興味・関心・態度を大切にしながら、子どもと教師と一緒に保育を創り出していく。それが保育の創造なのである。

宮沢賢治の詩の朗読をしていた保育を見る。

それをもっと子どもに分かりやすく、カルタ取り、文字遊び、ことば遊びにするとそんなに無理をしなくてもいい。ことばの心地よいリズムで、聴くおもしろさがある。覚えるのは二の次であろう。また子どもが分かりやすい絵をみる。そして想像するのである。

やはり保育のやり方、中身の問題である。子どもが興味を持つ方法が大切になってくる。

詩の意味はその時は分からないかもしれないが、ふと口ずさむことができる。決して無理強いをしないことが鉄則であろう。

「のはらうた」くどうなおことみんなという、子どものたちへのメッセージのような詩の絵本がある。小虫、動物、草花、木々、太陽、月、星、石ころまでがつぶやいているのである。まさに子どもの想像の世界である。

身近な環境、選ばれた教材を、有効に活用しながら、子ども自身の視点を大切にしていって保育をめざしたい。そこには保育者として、子どもの遊びの質を見抜き、子どもの心に寄り添い、どこに学びがあるか、時間をかけて、保育する力量がいる。小さな子どもたちで、これから色々な力をつけ、自分のやりたいことを見つけられるような、

援助が保育者には求められている。スリランカというお国柄があり、幼児教育がこれからもっと、子ども側に立った幼児教育に進んでいくであろう。

現場の教員たちが、スリランカの子どもも自身が自由な気持ちで遊びを選び、楽しみ、生きる力が身につく援助ができるようにと願う。

日本の幼児教育も原点に立ち返る時であろう。

あるところでは、家庭でなされていた習い事が保育時間内でなされ、1週間のスケジュールが〇〇教室ということで決まっていると聞く。それが保護者のニーズなのだというのが、⁴⁾ある新聞記事に、ある幼稚園に通い出した子どもが、日々笑顔が消えていき、指しゃぶり、爪かみが増えた。その園は英語、スイミングを教えている、母親がどうしたものかと悩みを投稿している。

思い存分に遊び、友だちとかかわり、先生が好きという。本来、保育現場では、楽しくて、嬉しくて登園する子どもたちの姿がある。これが真の子ども姿であろう。

このように様々なことが保育の内容になっている今日、少し間違った方向に行っているのでは、と立ち止まって考えることである。どのように制度が変わっても制度よりも子どもへのかかわりの中での保育の内容であり、保育そのものの質である。

大人の都合を優先するのか、子どもを優先するのか、子ども優先が当たり前であろう。これからもこれが問われていく。

〈引用文献〉

- 1) 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」内閣府、文部科学省、厚生労働省 フレーベル館 平成27年2月 p306
- 2) 馬場繁子 講演「スリランカにおける幼児教育の現状と課題」—NGOの視点から—お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター国際教育協力セミナー 2003年10月
- 3) 神谷栄司・前田美智代編著「保育の四季」—こころの成長— 山学出版 p255～p256
- 4) 神戸新聞夕刊「イイミミ」2015年10月21日

〈参考文献〉

1. 高杉自子著 「子どもとともにある—「保育の原点」 ミネルヴァ書房 2006年
2. 三井圭子 「スリランカ・ハプタレー地区幼稚園の教育現場から幼児教育における環境についての一考察」 兵庫大学短期大学部研究収録 No47
3. 橋川喜美代著「保育形態論の変遷」 春風社 2003年
4. くどうなおこ・ほてはまたかし著 「版画のはらうた」 株式会社 童話屋 1998年